
最果ての漆黒【天使の魔法】

片桐紫奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最果ての漆黒【天使の魔法】

【Nコード】

N5183Q

【作者名】

片桐紫奈

【あらすじ】

暗殺者として戦乱の大陸を駆け巡り、そして大陸を統一した王としてあがめられる主人公セト。

彼は何故大陸を統べる王になりえたのか。

そして彼には唯一忘れることのできない「彼女」の存在があった。

かつて彼に命ぜられた任務である大陸中央部に位置する「セレーク王国」に対抗するレジスタンス勢力の頭目の殺害は、セトと謎の女

アイリの運命を狂わせる。

アイリの正体は一体何なのか。

セレーク王国の望みとは一体何なのか。

哀しき暗殺者の物語。

序章？（前書き）

暗殺者を主人公とするため多少残酷な表現があるのでご注意ください。
い。

序章？

序章？

穏やかな時間など彼が享受できるはずもなく

運命は常に華やかに、残酷に

大陸統一第二期時代二年、初冬。

金縁の豪華な窓の外の世界では、軽やかに軽やかに雪と雪の精が舞う。天にはどんよりとした分厚い灰色の雲が君臨し、地を白く塗り替えるが如く絶え間なく真白い雪を地へと遣わしていた。

天は灰。

地は白。

冬に入ったこの日、いと高き天に住まうという「神様」というお方は、どうも完璧に天と地を隔てたかったらしい。決して決して交わることはないように完璧に。しかしそれは、天と地が相容れない

完璧なる存在であることは、考えてみれば誰にでもわかることだ。

地上の者の思いは天に届くことはないし、天の思いも届くことなどない。

“神は存在する”と思い奉っていた頃、そのように考える者などこの大陸にはいなかった。地上の者の思いも、天の者の思いも、神なる存在により助けられ必ず成就すると。地から天へと向ける思いは“死者の復活”、天から地へと向けた思いは“予言・神託”として必ず姿を現すと……。

しかし、それら神を信じるが故に築き上げられ、神を信じるが故に矛盾に悩まされ続けたこの思想は、この時代になり抹殺されることとなる。

この大陸に「神」など存在しない。するのは唯一絶対の、絶大な権力を誇る大陸を治める帝王と、それに付き従う者たちのみ。

静かに降り積もる雪と雪の精に彩られ、金縁の窓の外の世界はただそこにあつた。ただただそこにあつた。

金縁の豪華な窓の内側の世界。年間を通して魔法の力により適温に保たれた王城の、広くそして豪華な会議室。床一面に金糸で繊細に細工された真紅の絨毯が広がり、赤と金とで統一された室内には、品を欠かない程度の粗い言葉が飛ぶ。

そして数人の人物が確認できた。

真っ白な大理石の卓に向かう者で大半を占めるのは恰幅のよい壮年の男。上等な服を纏っているのを見れば彼らが大陸王より爵位を賜

つた者や、大臣といった身分の者たちであることは一目瞭然だった。そしてそれらの者達から少し離れたところに座るのは、銀の長い髪を持つ整った顔立ちの男と、黒髪を優雅に結い上げた隻眼の美女、そして大陸王の側近として名高い白髪交じりの焦げ茶の髪を持つ初老の男。

それらの人物は、卓上に山のように積まれた書類に休むことなく目を通し、議論の真つ最中であつた。地方の統治方法、税の徴収、特権身分の整備、帝都へと続く道の敷設……大陸が統一されて早くも二年は経とうとしていたが、議題は尽きることをしらない。それこそ山のようにあつた。

ただし、いくら熱く激しく議論をしようとして、彼らは必ずある一方を盗み見ていた。結論を口にする時は必ず、視線はある人物に向けられていた。抜け目のない王の優秀な参謀は、その鋭い瞳に決して悪意を忍ばせることはしない。ただそこに宿るのは畏怖の念。

いったい何故か？

いったい誰がいるという？

しかし、答えは彼らの視線を辿れば自ずとわかる。

そう、視線の先にはこの大陸を二年前に統一した者、今や「皇帝」として大陸の民すべてから敬愛と畏怖の念を抱かれる、二十代半ばの長身瘦躯の男がいたのだから。

適度な長さで切られた漆黒の髪。深い深い青、藍色の瞳。王としての威厳は、まだ歳のせいかまだ感じられないが、その醸し出す威圧的な、絶対的なオーラは他に存在を認めさせるには十分だった。

「……帝都と各地方を結ぶ街道を敷設するにあたる予算を、次の会議までに各地方の代表者は算出してきていただきたい」

山ほどあつた議題の最後の一つは初老の男のこの言葉により一先ず終結する。大臣諸侯の顔には疲労の色が色濃く滲みでていた。会議が始まってから、かれこれ半日が過ぎているのだ。

この長い日彼らの緊張の糸は途切れることはひと時もなく、そして今この開放された瞬間でさえそれが許されることはない。

しかしそれでも大臣らは幾分か解放された表情を見せると、卓上に散らばる各自の資料を手早くかき集め、若い皇帝陛下に恭しく一礼しては部屋を後にした。皇帝よりも早く退出したこととなるが、そのようなことを気にする者などいない。結局皇帝自身は、大臣諸侯が全員退出するまで席を立つことはしなかった。

部屋に残ったのは四人。皇帝と、彼の側近中の側近として知られる初老の男、そして銀髪の長い髪を持つ男と黒髪を優雅に結い上げた女。

「……では、私たちも先に上がらせてもらいますね。あなたもお仕事は程々になさいな」

にこりと綺麗に微笑んで、黒髪の女は優雅に席を立った。それに呼応するかのように銀髪の男も席を立つ……もつともこちらは無表情、無愛想な顔ではあつたが。

「私は北西部の方の視察に。今回の会議を欠席した真意の程を確かめて参ります」

そう言つて一礼した彼だが、その言葉を紡ぐその口は不服そうに歪められていた。

「よろしく願ひします、閣下」

初老の男は人の良い、朗らかな笑みを覗かせると、深々と一礼する。

「頼みましたよ、兄さん」

そう苦笑混じりで言つたのは、他でもない皇帝自身だった。つまりは、この銀髪の男と大陸王は“兄弟”関係にあるということだ……もっとも特別仲がいい、というわけでは決してなさそうだが。

銀髪の男は、軽く皇帝の方を見やると、特に何の表情も表すこともなく足早に扉へ向かい部屋を後にした。荒い靴音がその機嫌の悪さを象徴していた。

「では……」

それに続くようにして黒髪の女も微かな苦笑を残して部屋を去った。柔らかな足音は遠ざかる。華やかな空気もそれにつられるかのようにしてこの部屋から消え去った。

部屋に残された人物は二人。皇帝とその側近の初老の男。

「……あの方も大変ですな。あなた方のような弟御が二人もいらっしやいますと」

微かな苦笑の込められた、そして真意をおそらく含んでいないその言葉は皇帝の不機嫌そうな咳払いによって一蹴された。

黒髪の女性が二人の姉というならば、皇帝、銀髪の男、かの女性は“姉弟”の関係にあるとみなしていいのだろう。会議室は広い。部屋は魔術によって適温に保たれているにも関わらず、残された二人に向けて寒さは確実に手を伸ばしていた。

「部屋を移しましょう、陛下」

そうしてゆつたりと紅茶でもワインでも頂きましょう。

しかし、それに対する答えはなく代わりに皇帝はその巨大な金縁の窓に近寄り、深い深い青、藍色の瞳を外の世界へと向けた。相変わらず外では真白き雪と、淡い光を放つ雪の精が舞い厚い灰色の空を彩っていた。

序章？（第2話）

初老の男は深く椅子に座りなおすと今一度ため息をついた。

皇帝がこのような姿を見せたとき、それは暫くここから離れる意思がないときであることを彼は実に良く心得ていた。理由は知らない、そして聞こうと思ったこともない。ただ彼はこのように雪と雪の精が舞い散る日は彼が窓辺に立ち、ただただその静かなる光景を、永遠とも思われる単調な時間を長いことその藍色の瞳に映しているのをこれまでに幾度となく目にしてきたのだ。

理由は知らない、聞こうと思ったこともない……否、それは聞くことは許されない空気が常に周りには立ち込めていた。それは皇帝、彼自身の過去を表しているかのごとく、誰にも知られてはいけくない重大な秘密のようにも思えた。

しかしこの日は明らかにいつものこの時間とは違う空気が流れていた。

目に見える変化はない。ただ空気が違っていた。

「……どうかなさいましたか、陛下」

この静寂の時間を遮られることを酷く彼が嫌うことを初老の男は知っていた。しかし、今は状況が違つと彼は判断した。それは説明など到底できるものではない、しかしいつもと何かが違つのだ。言うなれば、常なら一分の隙なく閉ざされていた扉が何故か今日は微かにこちらに開かれている、そのような些細な感覚。

その先に待つのが果たして光か、はたまた暗黒か、それすら判断できないほどの微かな変化。

だから初老の男は常とは違い静かに皇帝へと声をかけた。そして同時に気づいたのだ、彼の肩が微かに震えていることを。しかしその震えは寒さによるものではないことは、何ものよりも明らかだった。

「君は……」

静かに大陸王が口を開いたのはそれから少し経つてのこと。その声は静かで、しかし聞く者に注意を向けさせるには十分な魔力を持っていた。

「君は、人を殺したことがあるのか」

しかしその言葉を紡ぎだしたその声は酷くあっさりしたものだった。そしてその言葉は疑問ではなく、確認の色が濃く滲み出していた。初老の男は微かにその顔を引きつらせた。

「……長いこと戦争がありましたから」

長い長い戦争。それはつい最近まで彼らの側にあつた。決して忘れることなどできない悲惨な記憶。忘れようにも忘れる術のない記憶だ。

その側には常に死の影がうろついていた。

時には目の前の相手が、時には自らが死神になる毎日。命は常にその側にあり、そしていとも容易く消えていった。

「私は……言うまでもないだろう」

その皇帝の言葉は統一者として言ったのか、それとも彼の真の姿において言ったのか初老の男には判別がつかなかった。しかし、どちらにしても答えは同じ。

「想像はつきます」

面と向かって答える勇気など彼は持ち合わせてはいない。当の本人を目の前にして真実を口にするのは初老の男にとって何ものより酷なことだった。

しかし皇帝はその答えに気分を害する様子など一切見せず、瞳を窓の外へと固定したままだった。恐らくその藍色の瞳に映る表情もまったく変わっていないのだろう。血生臭い戦争の話も、殺人の話も皇帝にとっては乾いたものでしかないということは、ここ二年の内で十二分に悟っていたはずだった。

やはり怖いお方なのだ、この方は。

しかし再度、心の底から初老の男はそう思う。戦乱の只中にあつたこの大陸を見事に統一したこの男は、到底今の自分に理解できるような世界には立っていない。確かに彼は大陸を統一した英雄で、国民から敬愛とそして畏怖の念を抱かれる存在である。だが、国民が、大陸の民が感じ抱いている感情はそれだけではない。

大陸の民は彼が始めてその姿を現し、底の見えない青の瞳が自らに向けられたとき見てしまったのだ。

完璧なる漆黒を。その背後に映る完璧なる死の影を。

彼の手はあまりにも血に濡れすぎたのだと全ては悟ったのだ。

彼は絶対的な恐怖の化身だった。

しかし、同時に初老の男は疑問に思うのだ。

絶対的であるはずのその存在は時として酷く脆く見えたのだから。

窓辺にたたずみ、深く瞳を閉じる皇帝の顔は、深い悔恨の念に苛まれていくようにも見えるのだ。今にも崩折れるようにも見えたからだ。

皇帝陛下は全てに矛盾している。

それが初老の男の最終的な自らの主君に対して抱くものであった。

「雪の日の任務は、どうしても、何度やっても慣れなかった」

唐突な告白。静かに、まるで自分自身に言い聞かせるかのような
呟き。

「雪？」

皇帝の言葉に彼は無様にも言葉を返すことしかできなかった。しかし、皇帝は構わずもう一度言った。

「そう、雪だ」

任務、と呟きながら初老の男は彼の背を見た。

「どうしてです」

「……色だ」

「色？」

序章？（第3話）

あまりにも唐突すぎるその答えは、彼に真意を掴み損なせた。しかし、それに対する答えはひどく簡潔なものだった。

「真っ赤な血が真っ白な雪の上に広がる」

「……」

「赤は白地には映える」

不気味なほど。

呟くように言ったその言葉に表情はなかった。
むしろ不自然なまでに。

「何が正しいのか、正しくないのか。何が悪で何が善なのか。わからない……わかりたいとも思わない」

「陛下……」

ダン、と鈍い音が響く。それは皇帝が力任せに窓を叩いた音だった。

そうなって初めて初老の男は気づいた。ガラスに映る皇帝のその顔が、ほんの微かだが歪んでいるのを。それは苦悩の表情に似て非なる表情、いまだかつて彼はこのような悲痛な表情をみたことがなかった。なにがこれほどまで皇帝を、孤高で何者も自らと相對する者のいない世界に身を委ねる彼を苦しめているのか。彼には見当も

つかない。

「少しお休みになられた方がよろしいかと……」

“雪の中で死んだ者の魂はこの大陸を離れることができない”」

滔滔と紡ぎだされたその歌うような低い旋律にのせた言葉は、大陸に住まうものならば誰でも知っている、もちろん初老の男も知っている古い一種の伝承だった。

「その魂は雪の精として蘇り永遠に大陸を彷徨う」

大昔からこの伝承は信じられてきた。「雪の精」とは冬、とくに初冬に雪とともに天から舞い散る、淡い光を放つ極々小さな光の珠のこと。この大陸独自の現象である。

昔はこの光の珠は「死んだ人の魂」とみなされ、多くの伝承に、物語に残されている。しかし、今では自然現象であると証明され、広く大陸の民にも認知されている。しかし、淡い光を放ちながら真白き雪と共に天から舞い降るその幻想的な風景は神聖で、いくら雪の精が自然現象と判明した今であっても、死んだ人の魂、と結びつけてしまいたくなる。

初老の男は皇帝の言葉の後を続けた。

「雪の精として蘇った者は七年目の命日に当時の姿そのままに」

そして消え入るようにひっそりと、まるで自分自身に言い聞かすかのように皇帝は呟いた。

「想い人の前に現れる」

暖かいはずの室内は、すでにその暖かさを失っていた。寒さを感じることなどありえないはずにもかかわらず、そこは最早温度を失っていた。

皇帝も初老の男も、続く言葉を口にはしない。ただ空気に冷たい静寂が訪れ二人の間に流れ込む。幻想的な窓の外の世界は一行に変わる気配を見せず、それは不安という感情を沸々と初老の男に湧き上がらせた。

「……ただの伝承、作り話にしか過ぎません」

そんな不快な感情を消すために、初老の男は口を開いた。皇帝がそうだと肯定しさえすれば、全ては気のせいでも済ませることができる。しかし、彼に返された言葉は到底彼が予測できたものではなかった。

「本当に、そう思うか？」

皇帝の言葉には自嘲の響きがあった。驚いたように顔を上げた初老の男が認めたのは、窓辺に立ち、こちらに顔を向ける歳若い男。その姿には常の偉大なる皇帝としての影はない。皇帝としての権威もなにもなかった。

「人が蘇ることなどありえません……神が存在するならまだしも……」

動揺を必死に隠し、答えた初老の男の的確な答えは更に皇帝の自嘲を誘うものだった。

「そうだな。僕が言ったんだ……」

神など存在しないのだと。

初老の男は初めて間近にみる皇帝の藍色の双眸を静かに見据え黙答する。皇帝はまるで何かを待つかのように雪を、雪の精を見遣りそして深く目を閉じると言った。

「今日が七年目の命日だ」

と。それは全ての答え。

それが全てのことの始まり、そして結末。

「……どうせ暇だ」

話をしよう。

もう償うことができない罪の物語の。

再び初老の男を捉えた皇帝の深い深い青、藍色の瞳は静かに初老の男の答えを促す。その瞳にもはや悲しみも焦りもない。そこに映るのは真実だけ。

自らが犯した悲劇のありのままの姿だけ。

「お話してください……セト様」

皇帝の名はセト・カーライル。

彼はその答えに満足したかのように頷くと、ゆっくりとその重い口を開いたのだった。

序章？

序章？

華やかな栄華を誇った大陸統一時代が過ぎ、やがて大陸は様々な国の思惑の渦巻く動乱の時代に入り数百年。

大陸統一という野望をその胸に秘め戦争を続ける国々の一つに「セレーク王国」という国がありました。長い長い年月をかけ、大陸中央部での確固たる地位を築き上げたその国は今一時の幸せな、平穏な時間を手に入れることに成功しました。人々はセレークの末永い未来を疑うことはせず、そしてこの幸せな時間が永遠に続くものだと思ってもせず、ただただ毎日呪文の如く、同じ言葉を繰り返していました。

「セレーク王家に神と天使のご加護を」

と。

全ては王家のために、国のため、そして自分たちのため、と。だから王家を守ることに何の疑問も持ちませんでした。

口を開けば彼らは皆同じことを言いました。

「王家は至高の存在である「五大家」の末裔の治める北の大国と縁深い家柄。そのような存在に治められるこのセレーク王国はなんと神聖で尊い国なのだろう」

疑いもしなかったのです。

疑えなかったのです。

王家も、国民も、疑うすべを知らなかったのです。

『至高なる血』が何を生み出したのか

『アレ』がどんな脅威になりえるのか。

たった一人の人物がそれに気づいた時にはすでに遅く、しかしそれでもその者は一計を講じ、そして王家と対立したのでした。

しかし、全ては遅すぎました。

かくして、神は、天使は聞きました。

たった一人で希望が絶望だと訴えた者。

信じ続けたいと願う希望を信じた王家。

はたして真に正しいのはどちらかと。

第一章

第一章

深淵の闇の狭間で笑う君

それが隠すは絶望か

それが隠すは真実か

辺りはすべてが闇に支配されていた。深淵の闇はどこまでも暗く、闇夜においての唯一の頼りとなるはずの月は厚い雲によって隠されていた。

空を彩るものは星の一つも見えず、風の通り抜ける音が異様なほどに闇夜に響く。そんな闇の世界の中に現れた光、煌々と眩いばかりに輝くその灯は、この世界の唯一の希望のようだった。

灯を灯すのは大きな屋敷。そのほかに家と呼べるものはなく、だがその向かいに佇む古ぼけた、それでいて格調高い教会の存在はそれだけでこの一帯に神秘的な侵し難い空気を漂わせていた。しかし、

微かな希望は程なくして空虚に響いた銃声によっていとも簡単に碎け散る。

闇を劈く悲鳴は絶えることを知らずただただ何度も繰り返されては闇に消えていった。長い悲鳴は尾を引きそして消え去り、静寂がその姿を再び忍ばせて来たのと同時に灯は静かに消された。間髪を置かず微かな扉の開閉する音がし、一人の人物が闇に姿を現す。

それと同時に辺りには咽返るような硝煙と血の臭いがした。その人物は一つ深く礼をするとまるで逃げるように闇の中に溶け込んでいった。

失敗したな、と誰になく呟き僕は自嘲した。意識は嫌でも痛む腕とそして足に向く。

まさかここまで無様な姿を晒すことになるとは、そう思えばまた溜め息が漏れた。決して難しい任務ではなかったはずなのにこんなにもミス犯した自分自身に嫌気が差し、また何故か早まっている鼓動を押さえつけようと今の僕は必死だった。

闇に徐々に目が慣れ、そしてその闇に光が混ざり始めていることを認めればさらに気持ちは焦る。何故こんなにも今回失態を重ねる結果になったのか考える気力など遠に無く、ただ僕は国を出るために痛む足を速めることに専念することにした。

しかし、それさえ困難だったのだ。

あまりの痛みに眩暈がし、思わず僕は膝をつくことを余儀なくされる。なんてさまだ。こんな行動にしか従えない自分に嫌悪しか沸かなかった。

その時だった。

カツ カツ カツ

闇に響く軽い靴音。

誰一人として通らないと予測していたこの道を、何者かが遣ってくる。

その事実には愕然とし、力の入らない足を動かそうと試みるがそれは所詮失敗に終わった。腰に収めた拳銃に手を滑らせ握る。その行動ですら今の僕には必死だった。

カツ カツ カツ

足音がこちらに向かってくることは疑いようもない。

落ち着けと言いつけ聞かせ鼓動を沈める。拳銃を握る手が自らの血で滑ることに苛立つが手を離すことは出来ない。

カツ カツ カツ

滑る拳銃を握る手に一層力を込めた時、同時に自らの失態を悟った。鋭い痛みが一気に駆け抜け思わず呻く。

カツン

闇に響き止る足音。それは僕の目の前で止まった。仄かに辺りが明るくなったと感じるのは、この人物が手に持つ光……恐らくランプのせいだろう。

第一章（第2話）

痛みに手は痺れ銃口を向けることは今となつては困難であり、つまりそれは絶体絶命であることを如実に表していた。自分の身を守る術がない。そのことに絶望を通り越して呆れさえ感じていた。

「……大丈夫ですか？」

しかし、耳に届いたその声は予想を反した女の声だった。

何故女が一人、夜明けにも近いこの時間にいるのだろう。

その考えを進めるには今の僕は余裕がなかった。かろうじて判断出来たことは、身の危険がほんの僅かではあるが遠のいた、ということだけ。なんとか拳銃を握ろうと力を込めていた手から力を抜く。そして平静を装うことに専念すればいい。

「ああ。大丈夫だ」

いくら夜明けに近づいた時間だといつても、いまだ辺りが暗いということは事実であり、その闇に乗じれば女に正体を明かすことなくこの場を立ち去ることは不可能ではない。

平静を装った僕の声は、確かに完璧だった。後は立ち上がり去ればいい。しかし足は完全には回復していない。何とか踏みしめ立ち上がるも、それも限界だった。

「怪我を……！」

「すみません、たいしたことありませんので……」

足元がよれ無様にもその女の肩を掴む形となる。微かに鼻腔をついた甘い花の香り。その香りに危険を感じたのは何故なのか？

何とか彼女から離れようと動くも上手く足は動かない。そんな僕の異変に気づいた彼女は僕を再び地面に座らせる。ぴしゃりと微かに鳴る水音に女はハツとしたようにランプの光を地面に向ける。

「これの……どこが大丈夫なのです」

光に映し出された鮮血。闇に隠されていたその血は思いのほか地面を濡らしていた。ランプの光は弱くかろうじて僕の顔は彼女には見えてはいないだろう。

それでも僕は笑ってみせる。

ただしきちんと笑えたのか自信はない。じっとしててください、その言葉の後に足に柔らかいものが当てられる。

「スカーフですので役に立たないかもしれませんが……」

きつくそれは縛られる。外れないようにするかのようにきつく、きつく。その行動は脳裏に深く刻まれた。

「ありがとう」

そう言っ て何とか立ち上がる。当然痛みはあるが休んだためか、それとも彼女のおかげか、だいぶその動作は先程よりも楽になっていた。

第一章（第3話）

その時だった。

それまで空を覆っていた分厚い雲が不意に晴れ、満月がその姿を現した。そのか細く儂い月の光は、それでも十分に僕らの姿を互いに認めさせることを可能にしてみた。

僕の前に佇むのは金の髪を持つ少女。

青空をそのまま切り取ったような青い瞳は不自然なまでに美しく、真っ直ぐに僕を捕らえていた。彼女の周りに漂う眩暈がするほどの甘い花の香は、服に付いた僕の血の匂いとあいまって、咽返るような不快な臭いへと変わっていた。

「……それでは」

彼女は静かに笑みを見せると踵を返し、再び雲に隠れた月の創り出す闇の中に溶け込んでいった。

そんな後ろ姿を認め、僕は静かに銃口を彼女の背中に向ける。

姿を見られたのだ。

生かしてはおけない。

いくら辺りが暗くとも、長く親しんできたこの闇にもう目は慣れている。この銃口の先には寸分の狂いもなく彼女がいるだろう、そ

う思うには十分すぎるほどに自信があった。

何よりも嫌な予感がするのだ。

あの見透かすような青の瞳が、言い表すことの出来ない不安を掻き立てる。

このまま引き金を引くだけだ。そうすれば彼女を神の御許に届けることが出来る。

この漆黒の闇の中であっても、いくら距離が離れていようと、長年培ってきた僕の銃の腕さえあればそれは不可能なことではない、不可能であるはずがない。

そう、後は引き金を引く、それだけだったのだ。

しかし何故か僕は引き金を引くことが出来なかった。

早く撃てと唯一絶対の命令を発し続ける僕に、ただ僕は首を横に振り続けた。

今でないといけない。

次なんてない。

第一見逃してどうするというのだ。

ここで殺らなければ自分自身に何が起こるかわからない。

わかっている。

わかっていた。

か細い抗いの声がただ闇に漂った。

そして垂れるように銃を下ろす。

「何故撃てない」

何故彼女を殺せない。

何故彼女の瞳が頭から離れない。

その答えは見つからない。

早くこの国から出なければ。

虚ろな目で白み始めた空を仰いだ。

カツ カツ カツ

闇夜に香った甘い花。

その花言葉は「あなたは私を騙せない」

僕は祈った。神などとうの昔に信じることをやめたが、祈らずにはいられなかった。

『もう二度と彼女と出会わないように』
と。

第二章A（前書き）

第二章A

血染めのこの手を愛おしく想うことなく

黒光りするこの銃を恐れることもなく

ただ僕が笑みを零すのは暗黒の道の先

第二章 A

空は抜けるように高く青く澄み、そこには雲ひとつなかった。

通された部屋の窓から見えるその光景は、血生臭い地上とは隔絶した世界の如く穢れなき姿を呈し、そのあまりの美しさに思わず溜め息がこぼれる。僕と対峙し座すこの城の主は、その動作を見咎めるように片方の眉をほんの僅かに上げると、次には皮肉めいた笑みをその丹精な顔にのせていた。

「疲れているのかね」

「そういうわけではございません、陛下」

ならばよいが、とセレーク王国国王イクレシオンは薄紫色の瞳を細め冷ややかに笑った。

華やかな王城の中でも奥まったところにあるこの応接間は、それでも室内には上等の調度品が並びそこにひっそりとした静寂が寄り添っていた。国王直々の謁見にも関わらず室内に一人も従者がいないことは、これから僕に対して話される、依頼される内容が他言無用のことであることを如実に言い表していた。

この国、セレーク王国の国王であるイクレシオンは年の頃は四十といったところであり、眩い金髪と薄い紫の瞳をもつ男。武勇に優れ、自らの力量によってセレークを大陸中央部での強国にまで築き上げたこの王は、しかし国民の敬愛の念を向けられてはいない。影では民から狂王と呼ばれているという事実は国に入ってからまだその日の経っていないこの僕にも容易に知れるほどだった。だがしかし、その

ことは僕にとって然程重要なことではない。

第一この僕に依頼をしてくる時点でこの国の王が、権力者が狂気にあることは明らかなのだから。

「……そろそろお話を伺っても？」

僕がそう切り出せば、イクレシオンは卓上に広げられた大陸中央部を拡大した地図の上に指を滑らせた。

「我がセレークの北隣に位置する……」

飾り文字でセレークと示された場所からほんの僅か北を指は指し示した。

「アルヴェリオの森に隠れる、わが国に反旗を翻すレジスタンス勢力の本拠地を守る結界の破壊、およびレジスタンスの頭目の殺害を依頼する」

セレークの隣に接する森林地帯は、この国の天然の要塞であると同時に反抗勢力を匿う砦とも化している、ということか。何とも皮肉な話である。

「我が国は近々ラスウェル帝国との戦争を考えている」

次に彼の指が指し示したのはセレークの北東に位置するラスウェルという飾り字。

「対ラスウェル戦のことを考え、不穏分子を滅すると？」

「そのようなものだ」

地図から顔を上げイクレシオンを見れば、その薄紫の瞳は歪み薄い笑みを形取っていた。地図上に記された様々な国の名前。その数はざっと見ても二十はあるだろう。

他の小国家とは隔絶する軍事力を持った東西南北それぞれの局地に存在する四つの大国の支配の及ばない中央部は、局地以上に激戦が続いている。大陸を統一するという野望を捨てきれない、という国家はよほどの愚かな元首を戴いているのでなければ存在せず、大陸中央部での激戦の理由は、主に各小国の背後に控える四大国の代理戦争とでもいうようなものであるのが現状である。

つまり大陸は四つの、正確には五つの勢力に分かれて血で血を洗うような悲惨な戦争が続けているのが真実。そしてこのセレークという名の小国も、置かれている状況は同じなのだ。今この大陸にこの勢力から外れることなど、例外など一つもない。

第二章A（第2話）

「期限は今日から一週間以内、次の満月が出るまでだ。今すぐにアルヴェリオの森へ向かってもらいたい」

今すぐに出発すれば日暮れまでには着くだろう、イクレシオンは静かにそう言い添えるとズシリと重い皮の袋を投げてよこした。中身は簡単に想像がついた。

「なに、難しいことではあるまい。ことに君のような者にとってはな」

「……その割には羽振りがいいようですが？」

「私は投資を惜しまない性格なただけだ」

今一度王の薄紫の瞳を見る。始終落ち着かなげに空を行きかっていたその視線は、今も尚定まる様子を見せず、にやりと歪められた薄い唇からは微かな嗤い声が漏れた。

「失敗は許さない。これは我が国だけの問題ではない」

我が敬愛なる北座の御方のためにもこの計画は成功しなければならぬ。イクレシオンのその呟くような声が部屋に響く。

「我が国を救ってくれ……殺し屋よ」

僕は目礼だけを返し、静寂が満ちた虚しい部屋を後にした。

大陸中が戦争の渦に巻き込まれたのは僕が生まれる前からのこと、かれこれ二十年以上続いている。

そんな戦乱の中で闇に名前を連ねるのは決まって僕らのような殺し屋と呼ばれる類の人間だった。秘密裏に要人を謀殺する、それが僕のいや、長い歴史の中で受け継がれてきた我が家の生業だ。そう、これは半ば運命付けられたようなものであり、そしてこの運命に抗うことなど無駄なことなのだ、遠の昔に悟っていた。

今では何とも思わない。それが自らの運命であると、この手は血に濡れる運命であると受け入れてしまえばもう何も感じることは無い。たとえ、唯一従うべき主君を失い大陸中を彷徨う身となった今でもその宿命からは逃れられない。

下城し、見仰いだ空はやはり高く美しく。あまりの眩しさに、金貨の入った皮の袋の重さに、僕は眉を潜めた。明日にでも厳しい冬を迎えるというのに、今日の空は稀に見る雲ひとつ無い秋晴れで、しかし通り過ぎる風は身を切るように冷たかった。

祖国は北の果てにあり、その地の冬は極寒であると同時に美しかった。暖かな部屋から見た雪景色はただただ幻想的で、当時の僕はまさか自分が窓の外の国の外の世界、大陸中を彷徨ことになるとは思っていなかったはずだ。何も知らず、何も知らずとしていなかったあの頃を振り返れば自然と自嘲が漏れた。

王城からまっすぐに伸びるこの道の両脇には立派な屋敷が立ち並び、格式高く不思議と感じられる厳格な空気は、嫌でも昔の記憶を蘇らせる。祖国を捨てたあの日から、常に共に行動してきた愛馬の手綱はそれとなしに汗ばんでいた。

その時だった。

頭上で窓の開く微かな音と、そして小さな声が降ってきた。

「すみません、そのペンダントを拾ってくださいますか」

見上げたその先には金の髪を持つ色の白い青年がいた。逆光のため良くその顔は見る事が出来ないが、この屋敷に住んでいるのならよほど高位の役人の子息なのだろう。

少し前を見れば輝くペンダントが落ちている。拾い上げてみれば、裏面に複雑な紋章とそして、T・S・S・と恐らくイニシャルであるだろう文字が刻まれている。見ればそれはロケットだろうと予測がついたが、よもや開けるわけにもいかない。

手に取り青年を見上げたその時、不意に背後から声がした。

第二章A（第3話）

「ありがとうございます。息子の非礼をお許してください」

振り向けばそこにいたのは、柔和な笑みの似合う翡翠の瞳を宿した銀の髪の男だった。年のころはそう若くも無く、かといって年老いているわけでもなかった。差し伸ばされたその手にロケットを乗せれば、彼は大切そうに手も包み込んだ。

「……旅の方ですか？」

疑問でいて確認するような声音に、僕は静かに肯首した。

「ええ。これから出国するところですが」

なるほど、と彼は頷き空を見仰いだ。

「今はこのように天気も良いですが、もう少ししたら雪が降るほど寒くもなるでしょう。十分お気をつけてください」

暖かく優しいな声音は僕の意表を見事についた。王国の高官であるだろう身分の御仁が、一介の旅人にこれほどの言葉をかけるものか。しかし、それを今思案しても意味の無いことなのだ。僕はそう自分に言い聞かせるようにして、そして笑みを作った。

「お気遣いありがとうございます。では、先を急ぎますので」

気をつけて、と男は笑みを一層深めた。何故かその笑みは作り物

めいていて、それでいて優しく、彼に背を向けても脳裏に残った。

「ザベル、あの方は？」

「シド様がいらっしゃるまでもありませんよ」

背後で聞こえた冷徹な声と嗜めるような声が聞こえたが、それが誰の言葉であるか確かめることはしなかった。

セレーク王国は魔術の進んだ国として大陸中央部では有名だった。自然の力を具現化させ、自然を、命をそして記憶さえも操る力を持つ魔術師は太古の昔には大陸の民の大半を占めていた。

しかし長い歴史のなかに魔術を持たない無魔力者が生まれ、そして魔術を司る国と魔術を持たない国とで争いが勃発した。それが今まで続く大陸の戦乱の時代の始まりだった。

大陸は大きく、地域によって肌の色、目の色、髪の色など様々だが、ここではそのようなことは差別の対象にはなっていない。差別の対象と化すのはあくまで魔力を有するか否か、であり続ける。

魔術師は無魔力者を忌み嫌うのが常であり、そしてその感情は戦乱の大陸を更に泥沼に陥れていた。僕の祖国は魔術至上主義の国だったため、大陸に無魔力者しかない国などの存在を知った時は本当に当惑したものだった。

第二章A（第4話）

だからこそ今から向かうアルヴェリオの森に集まるレジスタンス勢力は無魔力者が多くいるだろうと判断できる。

昔においてもここセレーク王国では魔術師である王族を支持する者達と、迫害され続けてきた無魔力者達によっての内乱という歴史がある。その内乱によって無魔力者はセレークを追われ、周辺国に亡命した。魔術を信仰することによって、セレークの主君たる北の大国に忠誠を誓うこの国は、そんな歴史を幾度と無く繰り返しその迫害の規模はセレーク王国が領土を広げるほどに強力になっていった。そしてついに国を追われた無魔力者が群をなし森林地帯の中でも奥にあり、昼尚暗く獣も多く出るアルヴェリオの森を牙城としてレジスタンスとしての活動を開始した、というところか。

しかし、僕の記憶の奥底に刻まれた一つの言葉がある。

魔術師は無魔力者を軽蔑し迫害するが、無魔力者はそのようなことは望んでいない。彼らが求めているのは自らの優性ではない。独裁ではなく万人に開かれた政治だ。

そう教えてくれた学士は次の日には姿を消していた。

魔術師は、今の大陸では明らかに数からして無魔力者には叶わない。だからこそ無魔力者に対抗するために自らを選ばれた存在として自負し、一つの思想を掲げ強権的にまとめることが必要だった。そしてその性格は現在の戦乱の世においては最適であった、というだけだ。

だからこそ、思想を乱すものは根絶しなければならない。もしそれが、同族であったとしても容赦はしない、出来ない。だから先進的な考えをする僕の敬愛する学士を国は殺したのだ、と幼心に思っていた。

混沌の世では絶対的な指導者は必要である。烏合の衆を纏め上げ国家として確立するには、時には冷酷に迅速に判断することが求められる。さもなくば人々は離散し国は崩壊する。かつてはその理に従おうとしなかった無魔力者のみの国も、今では多く王政、帝政、そして独裁を敷いているのはこのためだった。

だが、その体制を拒み、独裁による迅速さよりも、より多くの国民の意見を聞くことを選んだという変革が意味するのはセレークに反旗を掲げる勢力がこの時代では叶わぬ理想に走った結果であるといか言いようが無い。

現在は過去でも未来でもなく、ただの現在であり、そして時の情勢は刻一刻と流れ行く川のように変化を続ける。とどまることなど知らない。

理想を実現させるには、それに見合った時に確実に実行することが大切なのだ。万人の考えを受け入れることを掲げるレジスタンスは、確かに無魔力者の掲げる理念に一寸も間違っていない。しかし実行するには次期が的外れだったただけだ。そしてこれは致命傷に値する。

それは平和の世にこそ相応しい。

それは戦争など一切起こらない理想の時代にこそ実現するべき夢である。

手綱を引き、馬の首を一撫でした。

時流に適合しなかった理想郷。これから僕が向かうのはそんな「国」だ。

いかめしい憲兵の守る門をくぐり、そして僕はそこへ向かうため馬に拍車を入れた。

第二章A（第5話）

セレーク王国から離れ馬を走らせ数時間、未だに僕は目的の地へたどり着けずにいた。アルヴェリオの森を含む森林地帯には数時間も前についている、しかし肝心の中心部にいけずにいるのだ。

それもそのはずである、森林地帯の中でも奥に有るアルヴェリオと呼ばれる森はかつて幻の森と呼ばれたほど、そこまでたどり着くところこそが難しいのだ。

レジスタンスの殲滅など王国軍を派遣すれば赤子の手を捻るほどに簡単に出来る、しかし本拠地に潜入することは容易には出来ないのが現状だった。長く軍を派遣すれば、それだけ指揮は下がり王国の防衛も薄くなる、そうなってしまうえば肝心なラスウェル帝国に戦争を望んだときには負けは決定している。つまりこの任務はとんだ貧乏くじを引いたことになる。その様なことを考えればため息が止まることは無いのも当然だった。

すでに明るい日差しはその姿を潜め、今では夕焼けすら消え去った。頭上に瞬く星屑とまだ満月には遠い月は秋の終わりを告げようとするかのように、霞のかかったように淡く輝き祝福など到底得られるようなものではなかった。

夜風は寒々とし、外套の前を合わせ手綱を握る手に今一度力を込めた。先ほどから何度も同じところを通っている、と木に記した傷が示していたがその間違えは一度などというものではないようで、最早落胆を通り越してこの感情は怒りと呆れと現わすのが妥当だろう。不機嫌そうに鼻を鳴らす愛馬の頭を少し搔いてやるも、もうそれも効果は無いらしく機嫌は直らない。

「……ったく、こればかりはどうしようもない」

そう低く唸った時、目の端を何かが走り抜けた。

急ぎその方向へ目を遣れば人の後姿が遠ざかっていくのが確認できる。闇に包まれようとしている時間だが、これしきの闇ならば僕の目は十二分に機能していたし、何よりも走り去るその人物は眩いばかりの金の髪をなびかせていた。

この森林地帯に人などもとより住んではない。それは自動的に今の人物をレジスタンスの一員とみなすことに繋がる。

「金の髪のレジスタンスの一員、か」

ついていけばいいだろう、あれほどに目立つ容姿なら見失うわけも無い。何しろそいつは馬にさえ乗っていないのだ。

手綱を引き馬首をめぐらす。拍車を入れて後を追う。決して抜かぬように歩調を調節し、近すぎず遠すぎず背中を追う。森の落ち葉のおかげか蹄音は響かず柔らかな絨毯の上を歩くかの如く微かな音しか残らない。

もし万が一聞こえたとしても、獣の立てる音だと思い込むかもしれない、つまり安全は限りなく確保されているのだ。

長い間寒空の下変わらぬ風景の中に目を凝らしていたその疲れからか、このときばかりは楽天的な自分がいることに驚く。常の僕ならその様なことは、楽天的なことなど考えるはずが無い。背後に視線を向かわせ、殺気が無いかを目を閉じて観察し、片手は必ず銃に触れさせ安心するしかない。安息など寝るひと時にもありはせず常に何か暗くよんだものが付着して離れない幻影を見る。

だから相手を撃ったとき、目標を完殺した時ようやく束の間の安息が訪れる。

それだけが僕の精神を安定させる方法だった。それは血筋なのかも知れない、いやそうなのだろう。暗殺を生業に生きてきた一族が正常な精神をもっているはずなどないのだ。一族は負を殺戮し自らに取り込むことで負を負った、それによって狂気は生まれる。

世界に光だけが溢れることなど、平和だけの世界になることなど無いのだ。それは生まれ出でたときからの定めであって、だからこそ闇も戦争も存在する。

人生においての自分の役目がどこに属するか、僕たちは明確に知っていただけ、決められていただけで他はただ自分がどこに属するかを見つけられていないだけなのだ。血筋に縛られ続ける狂気、終わることの無い輪廻。この輪から逃げ出す方法は無いのかと模索した時期もあった。しかしもうそれも諦めたのだ。

だからこそ今、僕はここにいます。

第二章A（第6話）

道を案内しているなど、この愚かな奴は露にも思っていないのだろう。その無知さを思えば苛立ちと哀れみがこみ上げ口の端を持ち上げた。

だから、その人物が取った行動に反応できなかったのだ。

「こんばんは。何か御用ですか？」

飛んできたよく通る声、向けられた整った顔。金の髪に縁取られたその顔にはにこりと友好的な微笑が乗せられていたが、それは安心するにはまだ早い。夏の晴れた日の青空をそのまま切り取ったような美しい青の瞳は射抜くようにこちらを見据えていた。

何が起こった。

思考は混乱する。触れていたはずの銃はするりと手から抜け落ち、思わず引きすぎた手綱を嫌った馬は立ち上がる。

そんな苛立つ馬を抑えることよりも僕は何故か彼女を凝視することだけを選んでいて。物音に気づかれたのはいつだったのだろう、無意識に僕は笑っていたのだろうか。いや、それはないだろう。そんなことはしない。では何故なんだ。分からない、わからない。何故これほどまで動揺するのも分かりはしない。

「この辺りは迷いやすいですから、もしかして道に迷われたのかと思います。何かお役に立てることなど無いでしょうか」

彼女の声に敵意は見えない、いや完璧に隠し切っているといった方が良いでしょう。笑みを形作る空色の瞳はあまりに鮮やかで全てを見透かすように真摯であるのも事実だった。警戒していないわけではないようだ。しかし特別に警戒している様子も無い。言葉を選び取るのに時間がかかった。次の僕の一言は何よりも重い一言になるだろうと予感していた。

「ええ、それが……」

「もしかして貴方！」

思案に思案を重ねて遂に絞り出した言葉は、同時に発せられた彼女の言葉に無情にも遮られ、加えて彼女は自らの言葉を譲るような真似はしなかった。僕の言葉など聞こえなかったかのように桜色の唇を優雅にめくるとさらににこりと微笑した。

「志願者さん、かしら？」

志願者、その意味することはこの場で発せられたのならただ一つ。

「はい、是非私も加えていただきたい」

セレーク王国に反旗を翻すレジスタンス勢力のことを間違いないでしている。目の前で微笑む少女がレジスタンスの一員とは考えられないが、身内の誰かが関与している可能性なら無い方が不自然に思えた。彼女の発言は全く、願っても無いことだ。そしてどうしようもなく愚かだと虚しくなる。

「そうですね」

しかし次の瞬間僕は自分に突きつけられる銃口に無様にも目を見開き差し向ける者、目の前の彼女を凝視した。すばやく手を銃へと伸ばすが、そのときには彼女の手は下に向いていた。

そして耳に入るのは、くすくすと笑う天使とも悪魔とも判別のつかない静かな笑い声。

「もしも私が王国軍の人間だったら死んでますわね」

「でしょうね」

知らず知らずのうちに苦笑が漏れていた。確かに、その可能性も残っていたわけだ。しかし僕はあえてその点には目をつぶっていたのだ、いや明らかにその線はないと否定していた。

彼女のまとう空気に「人を殺した」という色は無い。これは直感的に解るものであつて、確固たる証拠があるわけではない。だからこれは単なる僕の勘だった。そしてそれがすべてだった。

「私が何を誘っているのか、わかりますね」

「セレーク王国に対するレジスタンス勢力への参加、でしょう」

依頼日当日、僕の目の前に不敵に微笑む天使が現れた。澄んだ空色の瞳と金の長い髪を持つ、彼女。

「私はアイリ。アイリ・クローゼ」

アイリ・クローゼ。余計な名を省いた、自らの名だけを簡素に表すその名前。頭上で輝く月も星も全く眩しくなどないのに、僕は目

を細めて月を背負い立つ彼女を見ていた。白い手は握手を求めてこちらに差し出され、もう片方の手は何も持っていなかった。

「セト・カーライル」

名だけを述べて握手に応じる。ほんの僅かに握り離し、僕は再度彼女を見つめた。

不思議な人だ。

何が、とは明確には分からないがこれは勘だった。

僕の勘が外れることはほぼない。

第二章 A（第7話）

ついて来るようにと一言言つと、彼女はもう僕のほうを振り返ることはしなかった。馬を引き、ただ彼女の背を見つめる。どうせ周りを見渡したところで、道など覚えられるはずなどない。今回の任務に利益となることもないだろう。

第一もはや周りは闇に包まれ自分の足元さえ底深く澱んでいた。

「セレーク出身、には見えないけど何処の国？」

暫くの沈黙の後振り返ることはせず、彼女は僕に話しかけた。

「セレークよりも更に北です。旅をしていて、それで」

そこまで言葉を紡ぐと彼女はいい、と僕の言葉を遮断した。

「何がです？」

「何故参加を希望するか、理由は言わなくていいわ」

「何故？」

「それが私達の決まりだから」

即答でいて簡潔な答え。歩く速度は全く変わらず、周りを囲い込む木々ですら違いは見つけられない。

頭上にはいつも何かの星座が浮かぶが、そのうちのいくつの名を僕は知っているのだろうか。

答えというのはかくも難しい。難しいが故に簡素になる。

「何を考えているのですか」

その声は真後ろからだった。

何が起こった？

金の髪の少女の姿は目の前にはなく、しかし背中から伝わる空気の震える音が人が後ろにたっていることに対する答えだった。そして遅れて気がつく。なぜ手首を掴まれている。

「何の話です」

「だから、今何をしようとしていたのです」

つかまれた手首。手首から下の掌が掴んでいるのは闇より光沢を持つ固い物。

「いきなり銃を取り出して何をする気です」

銃を取り出していた？その事実には自ら驚きを隠せない。何故その様な行動をとったのか、今僕は彼女に道案内をさせているのだ。ここで死なれて困るのは僕自身、それなのに何故このような行動を無意識でとっている。

「いや、これは……」

獣が見えたから、とでも弁明すべきなのか、いやこの暗闇で見えることなど不可能だ。ならばなんと答えようか。絡まる思考を落ち

着かせる、しかしまた僕が言葉を発する前に彼女が笑う。

「そんなに私のことが信用ならないのですか？」

「そうですね。私も長いこと旅をしています。特にこの御時世で旅をするには自らの警戒心だけが頼りになることも少なくないので。非礼をお許しを」

そう何とか思考を纏め上げれば、目の前の彼女は一瞬真剣なまなざしを投げかけてくる。しかしそれは本当に一瞬のこと。で次に見た彼女の顔は笑顔だった。

そして再び僕は歩きだす。流れる金の髪、晴れた日の空の色の瞳。今になって気づく。僕は、今回の任務を忘れるほど本能的に彼女に銃口を向けていたのだ。

頭の中では尚も警鐘がなり続けている、これは危険な奴だと。信用してはならない奴であると。しかし、今の僕がレジスタンス勢力の牙城に近づくにはこの女を信用するほか無いのだ。それ以外に方法など無い。前方で背筋を正して歩む彼女の背を今一度強く睨みつけ、気づかれない位に小さい溜め息を一つ吐き出し、僕は彼女に従った。

第二章A（第8話）

結果として、レジスタンス勢力の造る集落に至るにはそう時間はかからなかった。見渡す限り同じような木々の生い茂る道をいったいどのように抜けてきたのかは到底僕の頭では理解できなかった。気づけばここだと示され、眼前にぼつりぼつりと淡い灯が広がった。

集落とはいえ、家屋の作りはしっかりしたものだった。深い森の中に突然現れた赤レンガの家々は、どこかアンバランスでそこだけ切り取られた空間のような錯覚を起こさせた。

「さて、無事に案内できてなによりです。今日のところはどうしましょうか？」

アイリはにこりと微笑むと、僕に答えを促す。夜はもう更けている。今日のところはどこかに泊まり、明日の朝より行動を開始するのがいいのだろう。

「今日のところはもう宿を取ろうと思います。……ここに宿屋はありますか？」

なんとなく答えはわかっていたが、一応聞いた。

「残念ながら無いんですよ」

この集落に集まるのは大抵見知った人たちだから家を建てずに一緒に住むことが多い、と彼女は朗らかに答えた。確かにわざわざ外部者が一小国のレジスタンスに加わるなどということは滅多にないことなのだろう。ならば僕はいつたいどうすればいいのだろうか。

まさかここまで来て野宿をするなんて選択肢が出るとは思ってもみなかった。

「だから……」

「お嬢様！！何処にいつてらしたのです？！」

彼女が形の良い唇をめくると、背後から窺めるような厳しい色を含んだ声が飛んできたのは、ほぼ同時のことだった。アイリは、はっとしたように一瞬その空色の目を見開くと、間髪いれずに大きく一つ溜息をついた。

溜息は、夜になって急激に寒さを増した夜の空気にほの白く溶け、そしてふわりと消える。

「もう、お嬢様！！聞いておられますか？」

声の主は、年若い女性。僕らとそう年は変わらないように見えた。亜麻色の髪は一つにまとめられ、大きな緑色をした瞳は、翡翠を思わせる。

黒いローブを着ているためか、うまく背格好を図ることはできないが、おそらくアイリよりは高く、そして僕よりは低い、ということ は容易に想像がついた。彼女は、ひどく怒ったような表情をして僕たちに近づいてきたが、アイリの姿だけでなく僕の姿を認めたことで浮かべた困惑の表情は、近づくにつれて怪訝な表情そのものにとつてかわっていた。

それもそのはずだろう。

自らの「お嬢様」が見ず知らずの男を連れて帰ってきたのだ。不審

に思わないほうがおかしいというもの。

「お嬢様……こちらの方は一体」

彼女の表情が硬くなる。闇になれた僕の藍の瞳が捉えた彼女の行動は、ローブに手を潜ませた、ということ。そしてこれはすなわち拳銃を手にしていると考えたところで間違いなどないのだろう。殊勝な心がけた、と胸中で感嘆の言葉を投げかける。

そう、このような集落、レジスタンス勢力にとって一番に求められるものはなんといっても警戒心、懐疑心。

この勢力に公然と力添えするような勢力は今のところ何一つないのだ。たとえ同胞ともいえる「無魔力者」も、今はまだ味方ではない。

「彼はセト・カーライル。私たちの仲間よ、エミリア」

アイリは、何一つ悪びれていないかのように弾んだ声で答えた。

にこりと綺麗に微笑んで、彼女は反論など許さない、とても言うように小首をかしげて見せる。そんなアイリの自信にあふれた行動はいつものことなのか、エミリアと呼ばれた女性は、主君の前でするには無遠慮な溜息を盛大に漏らした。もっともそれをアイリは気に留めるような真似はしなかった。

そんな彼女たちを横目に見て、僕はなぜだかどこか懐かしい気がしたが、そんなはずはないと、一度頭上に輝く欠けた月を見上げ視線を逃した。

「彼、泊る場所がないのよ。ねえ、エミリア私のい……」

「なりません」

アイリの穏やかでいて軽やかな声を、エミリアは氷の刃を思わせ

る鋭い語気で制した。月を見仰いでいた僕は、その言葉の強さに一瞬顔をしかめ、エミリアを盗み見た。しかし、彼女の顔は想像していたそれとは違い、穏やかでいて知的な、興奮した表情とは無縁のもの。

「それだけはありません、お嬢様」

だったら、彼に野宿をさせる気？とアイリは苦笑の交じった言葉を宙に飛ばす。季節は晩秋。この時期に野宿をする、というのはいくらなんでも避けたいところ。そして、新参者ということで、ただでさえ動きづらくなっている今、さらに野宿という条件が加われば、それは最大の足かせになりかねない。僕の任務はあくまでこのレジスタンス勢力の掃討。なれあいをしたいわけではないのだ。

闇に潜み、機を窺う。これが今回の任務に求められるもの。それ以外には必要ない。

第二章 A（第9話）

「……先日の戦闘で亡くなった方がいましたね」

そして、しばらくの沈黙を破ったのは、溜息混じりのエミリアの声だった。

「その方の家なら、今は空いています」

これ以上のものは用意できません、と彼女は力なさげに言葉をくゆらすと、アイリの意向を窺うかのよう口を閉ざした。しばらくアイリは考えをめぐらすかのように視線を所在なさげに宙に漂わせたが、不意に僕の顔を見据えるとにこりと綺麗に微笑んで見せた。

「ということですか、セト。いいでしょうか？」

「もちろんです。お気づかいに感謝しますよ」

エミリアと呼ばれた女性に軽く頭を下げてみれば、彼女はいまいな表情を浮かべただけで、もう何も言葉をはさむ気はないのか、足早にこの場を去って行った。去りゆく後ろ姿はたちまち濃い闇に紛れこむ。

その光景を見て、改めてここが深い森の底にあることを認識した。

そんな世界にきらりきらりと光りを放つ金の髪。たったそれだけのことなのに、なぜだか僕には彼女が特別な存在なのではないのかと思われてならなかった。

「……本当は私の家に招待したかったんですけど。彼女の言うことには従うことにしているの」

ついてきてください、と踵を返した彼女の背中を追う。そのついでに周囲に目を走らせてみたが、あたりはすっかり闇に溶け込んでしまっていて人の姿はおろか、建物の外観さえ確認することはできなかった。彼女の背中をただ追うように歩いたが、それはすぐに終わりを告げて、一軒の家の前で彼女の歩みは静かに止まる。

「自由に使ってください。また明日、呼びに来ます」

扉が開くことを確認した彼女は、それではと言い残すと小走りに闇に消えた。あまりに鮮やかなその姿が視界から消えたことで、一瞬すべてが色あせたように思えたが、でもそれはあくまで一瞬のことで、戸惑いの間が去った後には変わらない空虚な空間がただここには横たわっていた。

「明日、呼びに来る……か」

任務遂行まで後六日。天上に浮かぶ欠けた月は、今や雲に覆われている。

第二章 B

第二章 B

その日の夜も、まだ月は確かに欠けていた。

いと高き天井に響き渡った怒号は、宵も更けた王城内に不快な程に響き渡る。愚にもつかないたわごとを繰り返すその男は、間もなく駆け付けるであろう憲兵の姿を闇の中に探しながら、それでも声高に言を発し続けることをやめなかった。

「この扉を開ける、狂王よ。貴方のしていることは天使に齒向う愚かな行為でしかない」

言葉は王の寝所を守る分厚い扉によって跳ね返される。しかし、そのようなことはこの男の気にするようなものではなかった。軍服に袖を通す彼は、しかしまだ兵士としては先月任官したばかりの新参兵。

彼は、強大な隣国であるラスウェル帝国との勝ち目のない戦争を迎えようとしている王国を救いたいなどという、極めて甘ったるい正義感を唯一の真実として掲げ、声高に至上の存在を愚弄する。

「狂王よ、あなたは変わられた。あの日から貴方は変わられたのだ」

「我が敬愛なる国王陛下は何一つ変わられてなどいない」

男の背後から響いた、氷のように冷たい声に彼は思わず声を失った。今までの饒舌さは息をひそめ、しきりにあたりを見回すも、彼の眼はあたりの暗闇を宿すばかりで一向に声の主を見つけられずに

いた。

「誰だ」

「王国を汚す輩に名乗る名などない」

透き通る女の声。凜として揺るぎのないその声は、男をさらに追い詰めていく。姿が見えない、声だけの女性。そんなはずはない、必ずどこかに隠れているはずだと思えば思うほど、彼は闇に眼を走らせる。

「姿を現わせ卑怯者」

その言葉にめいっぱいの嘲りの色を乗せる。これが彼が今とることのできる最良の方法だった。彼の正義の形だった。しかし、それに対する返答はくすりと笑う音。

「反逆者よ、そうそうにここから立ち去るがよい」

「姿を現わせ!!」

その時だった。

分厚い雲に覆われていた欠けた月が、ほんのわずかに姿を現した。硝子張りの回廊にたたずんでいた彼は、その細く差し込む月の光のおかげで長く伸びる影の出所を探り出す。一瞬身じろぎしたその影は、更に闇の奥へと逃げ込むかのように見えた。だから彼は、素早く女の腕をとった。しかし……

「無礼者!!」

女の声は怒りに滲んでいた。ぶつけるようなその怒りに一瞬瞠目した彼は、しかし次の瞬間自らが犯した罪を悟った。

「あ、あ、貴女様は……！！」

「去れ」

「あ、あ……」

「去れ！！」

目を見開き立ちつくしていた男はその言葉でまるで呪文が溶けたかの如く一目散に逃げだす。靴音は、荒々しさとともに遠ざかり、その遠ざかる音を耳に入れ確認している女の肩に、ごつごつした手が乗せられた。

「このような夜更けに貴女は一体何をなさっておいでですか」

「月明かりに照らされる花を見に来たまでです」

そうですか、と冷静に答えた胸に輝く国章と勲章を飾った軍人は、それ以上深く追求することはしなかった。静かに踵を返し、背後に控えていた憲兵に先ほどの男の処罰を命じて去らせると、依然その場を動かない女の頭を無遠慮にもなでた。

「何も気に病むことはありません。あなたはあなたです」

「私は花と常に共にいます」

「……そうですね」

軍人は真摯に応じると、硝子越しに庭園を見そして重ねてつぶやいた。

「しかし、あの方は薔薇よりも百合を好まれた」

血のような深紅の薔薇ではなく、清廉な白百合を。

はたして花は今でも、あの時と変わらない清らかな御心をお持ちなのだろうか。

しかし、そうつぶやいた時にはもうその女の姿は闇の奥へと消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5183q/>

最果ての漆黒【天使の魔法】

2011年2月14日17時48分発行